



IUFRO-J NEWS

No. 84 (2005.3)

「森林の社会的機能に関するIUFRO研究グループの 合同会議（北海道）」報告

森林総合研究所 田中伸彦
筑波大学大学院 伊藤太一

1. 会議の位置づけ

2004年8月23日から29日にかけて、北海道大学および道内の国立公園・国有林などをフィールドに、「森林の社会的機能に関するIUFRO研究グループの合同会議 (IUFRO Conference on Social Roles of Forests for Urban Population: Forest Recreation, Landscape, Nature Conservation, Economic Evaluation and Urban Forestry)」が開催された。

我々、IUFRO6.01研究グループ (6.01.00 Forest Recreation, Landscape and Nature Conservation; 6.01.02 Landscape planning and management; 6.01.04 Social aspects of recreation and tourism; 6.01.07 Nature conservation and protected areas) は、レクリエーションや景観、自然地域の保全に関する研究をテーマにしている。そして、同研究グループでは、5年ごとに行われるIUFRO世界大会の間に、1～2回程度、中間会議を主宰している。2000年8月にマレーシア・クアラランブルで開催された前回の世界大会の後については、すでに2001年9月から10月にかけて米国南部で中間会議が行われている。そのため、今回の会議は今期2度目の中間会議となる。

ただ、当初の計画では、いつも通り6.01研究グループのみで行う会議として開催する予定であったが、6.11.04の公益的機能の経済評価グループ (6.11.04 Economic

Evaluation of Multifunctional Forestry) および6.14の都市林業グループ (6.14.00 Urban Forestry) から共同開催の申請があったため、今回の会議に限っては、合同のグループ会議として開催することになった。これら2つのグループは、国際的には活発な活動を行っているものの、欧米研究者が中心で、グループに積極的に参加する日本人が少なかったため、この会議をきっかけに、経済評価および都市林業の日本人研究者・実務者との交流を積極的に進めたいと考えていたようである。

2. 会議のスタイル

IUFRO6.01研究グループの会議の開催スタイルは、ほかの研究グループと比べると非常にユニークである。我々のグループは、会議の期間中、1つの都市に居続けることはほとんどない。つまり、同じ場所に連泊せずに、参加者全員がキャラバン隊の様に移動し続けるのである。

先に述べたとおり、IUFRO6.01のメンバーは、レクリエーションや景観、自然地域の保全を研究テーマにしている。そのため、中間会議の際には、主催国におけるレクリエーションや景観、自然地域に関わる社会的環境の実態を共有体験し、その上でディスカッションを深めるという大きな目的がある。例えば、筆者が2001年に参加したアメリカの会議では、昼間は国立公園や国有林を巡り、ビジター管理、植生管理、環境教育、伝統文化的

環境の保存法などのトピックについて、現場を管理するレンジャーやフォレスターとディスカッションをし、研究者の発表は5時過ぎに宿泊所に戻ってから行うというスタイルをとっていた。研究者の日ごろの研究成果の発表セッションも重要ではあるが、ある意味そのような情報交換は、学術誌やインターネットでも十分可能な時代である。IUFRO6.01研究グループでは、それよりもむしろ地球上の各地の森林レクリエーションや景観、自然保全地域の多様性を、中間会議を通して体験し、グループ全体で認識を共有していくことに重点を置いているわけである。

ただし、今回北海道で行われた会議では、6.11.04および6.14との合同会議となったため、両グループからの参加者に配慮して多少変則的なスタイルをとった。つまり8月23日、24日に北海道大学で、研究者の日ごろの研究成果の発表セッションを集中的に行い、25日からIUFRO6.01グループのスタイルで北海道の国立公園、国有林等を巡るフィールドセッションに出発した。

3. 発表論文の出版

この様な国際会議を主催する際に頭を悩ませるのは発表論文の出版方法である。

筆者も何度か経験しているのであるが、国際会議が終わった後、なかなかプロシーディングが出版されず、数年たって忘れた頃に郵送されてくることがある。まだ送られてくる場合は良心的で、場合によっては、そのまま

お蔵入りという場合もないことはない。また、要旨集しか発行されない会議も多々ある。何百人、何千人と集まる大きな会議ではそれも致し方ないが、本会議はさほど大規模ではないので、発表者の研究内容の詳細が分かるものを出版したい。さらにいうと、近年は日本に限らず、過剰なまでの業績主義が蔓延している。要するに、ただプロシーディングスに執筆しただけでは高い評価が得られないため、査読付きの論文にする必要があるということである。

本会議の実行委員会では、この様なことを色々考えた上で、大会当日には参加者に査読付きの論文集を配布することにした。つまり、単なるプロシーディングではなく、学術委員会を立ち上げて、複数の査読者による審査をパスした論文を集めた1冊の独立した著書として出版することにした。ちなみに、出版物はSocial Roles of Forests for Urban Population (森林計画学会出版局から購入可能3,500円；写真-1)である。

この様な出版方法にした結果、会議当日にまとまった論文集を参加者全員に配布することができた。しかし、この方法のデメリットも浮き彫りになった。それは、エントリー時には約50件の申込みがあったのであるが、最終的に掲載された論文は13件となってしまったことである。多少ラフでもいいから多くの発表機会をつくるべきか、少数精鋭でもよいので、このスタイルを継続していくかは、次回のホスト国の判断に委ねたいと思う。

4. 会議の概要

8月23日および24日に北海道大学で開催された研究発表会は、6.01研究グループのコーディネーターであるフィンランド森林研究所のTuija Sievanen 女史によるオープニングスピーチで始まった(写真-2)。

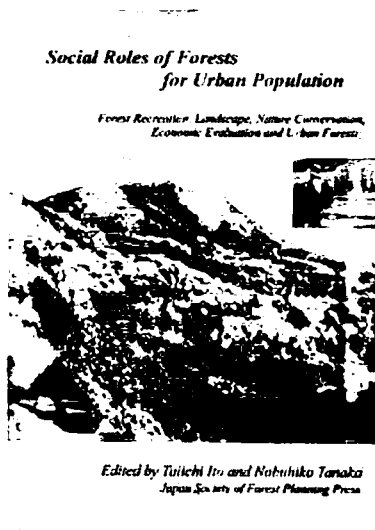


写真-1 Social Roles of Forests for Urban Population (森林計画学会出版局発行)



写真-2 Tuija Sievanen 女史(写真右)によるオープニングスピーチ(北海道大学にて)

その後、「北海道の自然保護—その歴史と思想（北海道大学図書刊行会）」などの著作で有名な依浩三氏による基調講演「北海道の森林と国立公園」が行われ、論文審査を通過した13件の論文に、1件の口頭発表を加えた計14件の発表が行われた。

先にも述べたとおり、この分野の研究は非常に地域性に富んでいることが特徴である。例えば、レクリエーションの研究テーマをとってみても、イスラエルからは「レクリエーションの森を確保するために如何に半乾燥地域に造林をするか」という研究が行われていると発表された後、森の豊かな日本からは「四国八十八箇所巡礼の道の現状と問題点」というオリエンタルなテーマの研究発表が行われ、さらにフィンランドからは「レクリエーションと産業としてのキノコ狩りの参加実態」に対する調査報告へと続いていくといった感じである。

「人が暮らしていく中で、余暇時間の森とのふれあいが大切である」という大前提が、全世界からの発表に共通しているものの、レクリエーションとして各地で実際に展開される活動や、その活動に対して研究者が行わなくてはならない命題は、場所によって大きく異なっていることが非常によく分かる。それを理解するためにも、このような中間会議を、数年に一度、国をかえながら行う必要があることを実感させられた。

8月25日からは、フィールドセッションを行い、道内4箇所の国立公園（大雪山、阿寒、釧路湿原、支笏洞爺）および国有林、アイヌ博物館などを訪問し、自然管理の現状やレクリエーションの実態などの説明を受けてディスカッションを行った。例えば、写真-3は、レクリエーション利用者数の把握のため、大雪山旭岳で行われている無人入山届けシステムについて、プロの日本人インテプリターから英語によるインテプリテーションを



写真-3 フィールドセッションの一コマ
（大雪山旭岳にて）

受けた後、ディスカッションを行っている場面である。森林地域へのレクリエーション入り込み者数を正確に把握する方法については、参加研究者全員の関心が高く、実際各国で色々な試みが行われている。そのため、メンテナンスに必要な管理人員や費用、届出の統計的信頼性などをどのように確保するのかなど、参加者の興味は尽きない。そのため、夏とはいえ寒さが身にしみる大雪山の上で、しばしの間、熱いディスカッションが続くことになった。

5. エクスカーション

本会議が終了した翌日の、8月30日、北海道から大阪伊丹空港に飛行機で移動し、京都・奈良を巡るエクスカーションを開催した。

このエクスカーションは、2001年のアメリカ会議の際に、欧米の研究者から強く要望されたため開催された。北海道のレクリエーションや自然景観は質が高く、国内をはじめアジア人からの評判は高いことは間違いない。しかし、ある意味欧米人から見れば、自国と似たスタイルのレクリエーションや自然景観を見聞きしている気分になることは否定できない。

そのため、エクスカーションとして古都京都・奈良を訪問し、社寺や日本庭園の背景として眺められる森林の存在（写真-4）、社寺に残された原生林（春日山）、磨丸太生産のために創られた特殊な森林景観（北山）などを十分に堪能してもらった。そして、わが国の古都における伝統的な風景の楽しみ方を体験してもらった。この年は相次ぐ台風に見舞われ、予定していた保津川下りが、増水のためにキャンセルされるなどの残念な面もあったが、参加者には、みな各々のスタイルでエクスカーションを楽しんでもらえたと思う。



写真-4 エクスカーションの一コマ
（京都鹿死寺（金閣寺）にて）

なお本会議には15ヵ国85人の参加があった。また、会議の運営にあたった委員は以下の通りである。多くの方々の協力の上で、今回の中間会議が滞りなく終了したことを感謝したい。さらに、本会議の開催にあたって、IUFRO-J、(社)国土緑化推進機構、札幌市からの助成を頂いた。これらの助成なしには、本会議を開催することは困難であったため、この場を借りて謝意を示したい。

実行委員会 (敬称略。)

愛甲哲也 (北大)、青木陽二 (国環研)、深町加津枝 (元森林総研関西、現京都府立大)、伊藤太一 (委員長、筑波大)、香川隆英 (森林総研)、栗田和弥 (東京農大)、小林昭裕 (北海道専修短大)、奥敬一 (森林総研関西)、小野理 (北海道)、庄司康 (森林総研北海道)、田中伸彦 (副委員長、森林総研)、上屋俊幸 (東京農工大)、山口

和男 (自然環境コンサルタント)、八巻一成 (森林総研北海道)

学術委員会 (敬称略。)

John Burde (米国南イリノイ大)、深町加津枝、Paula Horne (フィンランド森林研究所)、Frank Jensen (オランダ森林景観計画センター)、伊藤太一、Cecil Konijnendijk (オランダ森林景観計画センター)、Linda Langner (米山中山林局)、Zhiyoung Li (中国林業アカデミー)、Abdullah Mohd (マレーシア・ブトラ大学)、Ulrike Proebstl (オーストリア BOKU)、Tuija Sievanen (フィンランド森林研究所)、Hans Skov-Petersen (オランダ森林景観計画センター)、Alan Simson (英国リーズメトロポリタン大)、田中伸彦、八巻一成

IUFRO Working Party 5-04.12

第3回木材表面処理国際シンポジウム in 京都

(独) 森林総合研究所 木口 実

はじめに

2004年11月24日から26日にかけて、IUFRO第3回木材表面処理国際シンポジウム(IUFRO Working Party 5-04.12 3rd International Symposium on Surfacing and Finishing of Wood)が、紅葉彩る古都京都の京都市国際交流会館において開催されました。本シンポジウムは、IUFRO (国際林業研究機関連合) 第5分科会木材表面処理部会 (部会長Dr. Bernard Dawson (Forest Research Institute, New Zealand)) が主催し、京都大学生存圏研究所と(独)森林総合研究所との共催によるものであり、日本木材学会、(社)日本木材保存協会、日本木材保存剤工業会等の御後援を頂きました。また、IUFRO-Jよりシンポジウム開催援助金の交付を頂き、ここに厚く御礼申し上げます。

シンポジウム開催までの経緯

はじめに、木材表面処理シンポジウムについてこれまで

の経緯を簡単に述べさせていただきます。木材の表面処理技術は産業的にも非常に重要であるにもかかわらず、学術的には系統立てて確立されておらず、また国際的な関連する研究集会やこれをまとめる機関もないという状況でした。しかし、木材のエクステリア市場が拡大し、耐久化処理と共に屋外における耐水性向上が不可欠な技術であることから、1990年代にDr. Dawson やスイス連邦材料研究所のDr. Sell、ドイツWKIのDr. Hora、マレーシアFRIMのDr. Shakri、京大木研(当時)の今村先生らが中心となり、IUFRO第5分科会内に「木材表面処理部会 (IUFRO 5-04.12 Surfacing and Finishing of Wood)」を発足させました。これを受けて、アジア・オセアニア地域では、1996年に第1回のIUFRO木材表面処理シンポジウムがマレーシア (FRIM) で開催されました (大会委員長Dr. Shakri)。またヨーロッパにおいては、Dr. HoraやスウェーデンのDr. Ekstedt (TRATEK) らの木材塗装研究グループが中心となって、1998年に木材塗装研究国際会議 (International Woodcoatings Congress)

が発足し、第1回大会がベルギーで開催されましたが、IUFROとの直接の関係はありませんでした。続いてアジア・オセアニア部会では、1998年にニュージーランド(FRI)において第2回のIUFRO木材表面処理シンポジウムを開催しました(大会委員長Dr. Dawson)。その後、アジアやヨーロッパと共に北米や他の地域を含めた世界的な大会開催への模索がありましたが、ヨーロッパでは木材塗装に特化した会議の発展を目指し、「木材塗装研究国際会議」として2004年までに4回の会議が開催されることとなりました。一方、表面処理シンポジウムでは、塗装以外にも表面処理による木材の耐久性向上技術やVOC問題等を含めた表面処理全体を包含する国際シンポジウムとして、アジア・オセアニア部会ではなく世界的規模で今回の第3回シンポジウムを開催することになりました。

シンポジウム実行委員会

次に、シンポジウムの開催までの状況をお話したいと思います。今回のシンポジウムは、開催の約1年半前よりシンポジウム実行委員会を立ち上げ準備を始めました。委員長には、当時の京都大学木質科学研究所劣化制御分野の今村祐嗣教授(現在京都大学生存圏研究所教授)が就任し、委員会には木材の表面処理研究を代表する研究者にお願いすることとして、表面処理部長であるDr. Bernard Dawson (FRI, New Zealand)、耐候性研究の第一人者であるカナダのProfessor Philip Evans (UBC)、屋外木材塗装研究の第一人者のDr. R. Sam Williams (FPL, USA)、森林総研の片岡厚主任研究官、そして事務局として私の6名でスタートしました。

シンポジウムは、紅葉の美しい時期に京都で行うことが決定し、会場は蹴上の南禅寺隣にある京都市営京都市国際交流会館を借りることができました。本会場は、素晴らしいプレゼンテーション設備の完備したメインホールを持ち、ポスター会場に適する会議室や懇親会のためのレストランも付設されており、国際シンポジウムの会場としては申し分のない施設でした。また、利用料金もこのような国際会議には格安で提供して頂きました。会場の施設等に関しては、シンポジウム参加者からも好評を得ました。

シンポジウムの成否は、まず参加者を確保することであり、そのためシンポジウム開催の宣伝が重要となりました。1年前までに森林総研のホームページ上にシンポジウムのホームページを開設し、またメールにより関係する研究機関、研究者に直接連絡しました。しかし、参加申し込みに大きな力となったのは、シンポジウム実行

委員や連絡をお願いした研究者の方々からの直接的な参加の働きかけだったと思います。これにより、参加者は開催国である日本の他、マレーシア、韓国、インドネシア、フィリピン、アメリカ、カナダ、ドイツ、スウェーデン、ガーナなど15カ国から105名の参加者があり、木材の表面処理というマイナーな研究分野でありながら、国際色豊かな盛大なものとなりました。

シンポジウムの発表は、キーノート発表、口頭発表、ポスター発表の3種類としました。キーノートは、招待講演として本分野で活躍している世界的な研究者にお願いすることとし、シンポジウム実行委員の海外からの3名と、スウェーデンのDr. Ekstedt (TRATEK)、京都大学農学部の藤井先生、大阪大学工学部の宇山先生の6名にお願いしました。口頭発表は17件、ポスター発表は27件の申し込みがありました。講演要旨集はA4版で



発表風景



口頭発表風景

466ページに及び、木材の表面処理分野における貴重な資料となったと思います。ポスター発表では学生の参加が多くあり、国際シンポジウムでの発表という貴重な体験ができたことと思います。

シンポジウムの状況

初日は、午後からレジストレーションを始め、3時よりポスター発表者全員によるショートプレゼンテーション（各4分程度）が行われました。このショートプレゼンは、本シンポジウムの目玉の一つでしたが、参加者からは好評を博しました。「このような試みは初めてだが、発表の概要が分かって大変良かった」という声が多く聞かれました。その後、参加者によるウェルカムパーティーになりましたが、ショートプレゼンテーションがあったためか、参加者同士がすぐにうちとけたように思います。

2日目のオープニングセレモニーでは、IUFRO表面処理部会長のDr. Dawson(NZ)、実行委員長の今村教授、共催機関である森林総研の田中潔理事長、京都大学生存圏研究所から日本木材学会会長でもある川井秀一教授よりスピーチを頂きました。引き続きキーノート発表、口頭発表が開始されました。今回のシンポジウムでは、口頭及びポスターの発表者に対してシンポジウム実行委員会より発表証明書を贈ることにしました。日本ではなじみが薄いですが、発表者には大変喜ばれました。当日夕方にはポスターセッションが行われ、その後シンポジウムパーティーが開催されました。パーティーでは、林

野庁の河野木材課長や(社)日本木材保存協会の楢垣会長からも挨拶を賜わり、晩秋の京の夜に遅くまで歓談がくり広げられました。

3日目は午前中に口頭発表を行い、実行委員でありIUFRO表面処理部会副会長でもあるDr. Williamsによる閉会の辞で本シンポジウムが閉会となりました。午後からは、希望者によるエクスカージョンがあり、京都市内の伝統的木造建造物と表面処理技術を見学することになり、海外からの参加者を主に15名程度の参加がありました。

終わりに

木材の表面処理技術は、研究としては我が国ではまだ緒についてはかりの分野ですが、本シンポジウムにはこの分野を代表する欧米の研究者の多くが参加し、会議では活発な議論が行われました。また、アジア各国からも興味深い研究発表がありました。このように、本シンポジウムは我が国における木材の表面処理研究の出発点となる記念すべき大会となり、この分野の研究者の一人として感慨深いものがありました。IUFRO木材表面処理部会では、本年8月にオーストラリア（ブリスベン）で開催されるIUFRO世界大会（<http://www.iufro2005.com>）においてもセッションを開催する予定であり、日本からも多くの参加を期待しています。

最後に、本シンポジウム開催にあたり多くの方々にお世話になりました。紙面をお借りして御礼申し上げます。



表面処理部会会合



ポスター発表風景

事務局からのお知らせ

1. IUFRO-J 平成17年度機関代表者会議のご案内

第116回日本森林学会大会が北海道大学で2005年3月27日(日)～30日(水)の日程で開催されます。それにあわせて下記の日程で標記会議を開催致しますので、機関代表者の方々のご参加をお願い致します。

日時：2005年3月29日(火) 11:45～12:45

場所：北海道大学内(文系総合研究棟5階W517)

議題：会務報告、会計決算報告、監査報告、事業計画案、予算案など

場所の詳細は、日本森林学会誌Vol.87 No.1の「第116回日本森林学会大会プログラム」をご覧ください。

2. IUFRO-J 研究集会事務局・参加助成

平成16年度は12月末に集計し、事務局2件、参加1件の応募がありました。選考委員及び事務局による厳正な審査の結果、以下の事務局2件と参加1件を助成することとなりました。

氏名 (所属)

事務局：鎌田直人(金沢大学)

荒木誠・清水晃(森林総合研究所)

参加：吉村哲彦(京都大学)

平成17年度についても助成金申請を随時募集していますので(12月末締め切り)、応募要領に従って事務局に応募してください。なお、助成を受けられた方には、報告書を提出して頂きます。報告書の内容はIUFRO-Jニュースに掲載致します。

3. ユフロ世界大会(2005年8月8～13日、オーストラリア・ブリスベン)の参加登録について

早めに登録するほど下記のとおり大会参加費がお得です。また、大会参加費は、先進国、途上国で異なります。日本から参加する場合は、先進国の大会参加費になります。

○早期登録(2005年4月1日まで)大会参加費 950オーストラリアドル

○通常登録(2005年7月8日まで)大会参加費 1,200オーストラリアドル

○最終登録(2005年8月1日17時まで(オーストラリア東標準時))1,500オーストラリアドル。

なお、1オーストラリアドルはおおよそ85円です。

IUFRO世界大会に関するより新しい詳しい情報は次のウェブサイトをご参照ください。

<http://www.iufro2005.com>

<森林経理学専門用語集～中国語版～ご案内>

TERMINOLOGY OF FOREST MANAGEMENT PLANNING (Chinese Version)

Shuen Chao WU監修、ドイツ語・英語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ポルトガル語・ハンガリー語・ルーマニア語・日本語の9カ国語対訳付き、IUFRO Secretariat, 2003年発行(IUFRO World Series Vol.9-ch), A4判, 189ページ, 定価30 USD。

購入希望の方は、IUFRO-J事務局にご連絡ください。1部2,000円(送料込み)で販売します。また、森林経理学専門用語集～日本語版～(ドイツ語、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ハンガリー語の7カ国語対訳付き)の在庫もあります(1部2,500円(送料込み))。なお、事務局での在庫がなくなった場合には注文をお受けできないこともありますので、ご了承ください。

(事務局)

会費納入・研究者登録のお願い

IUFRO-Jの活動は会費収入で運営されております。健全な会の運営のために会費納入をお願いいたします。

A、B会員におかれましては、会費納入と併せて研究者（会則第5条）、連絡員（付則1）の登録（事務局への連絡）をいただいております。また、転勤・退職等で機関を離れた皆様には、あらためてC会員としてご登録いただきますようよろしくお願いいたします。

納入方法

郵便振り込みの場合

郵便振替口座：00190-3-159224

名義：IUFRO-J事務局

*事務局といたしましては、できる限り郵便振り込みをご利用いただきますようお願い申し上げます。

銀行振り込みの場合

関東つくば銀行 牛久支店 普通預金口座 697583

名義：IUFRO-J事務局 田中 潔

注意：-（ハイフン）をお忘れなく。

IUFRO-J News No. 84

平成17年3月17日

国際森林研究機関連合-日本委員会事務局

〒305-8687 茨城県つくば市松の里1

森林総合研究所内

TEL 029-873-3211 (232)

〔編集・発行〕